

ゲルハルト・リヒター、 芸術と歴史

豊田市美術館学芸員 鈴木俊晴
すずき としはる



ゲルハルト・リヒターというドイツの画家の個展が日本を巡回している^(注1)。リヒターは1932年にドイツのドレスデンに生まれ、戦後は東ドイツで専門的な美術教育を受けるものの、西側の自由な表現に憧れて、1961年、ベルリンに壁が立つほんの数カ月前に西側へと移り、デュッセルドルフの芸術アカデミーでふたたび学生となって学び直すことになる。この街は今日ではヨーロッパ最大の日本人コミュニティがあることで馴染み深い^(注2)が、1950年代から既に、パリやニューヨークのような大都市ではないにもかかわらず、ヨーロッパのアヴァンギャルド芸術の重要な拠点の一つだった。日本の「具体」(具体美術協会)とも連絡したグループ・ゼロやイヴ・クラインやピエロ・マンゾーニといった近隣国の先進的な作家を扱う画廊、そしてなによりも常に話題の中心にいたアカデミーのお騒がせ教授ヨ

ゼフ・ボイス^(注3)。そこに集った若い学生たちは、例えば絵画であつても絵筆を用いて絵具をカンパスにおいて描くという当然の形式を疑い、新しい可能性をそれぞれに追究していた。東ドイツでアカデミックな美術教育を受けていたリヒターは、改めて自由な表現、自分に由来する表現とはなにかを、そここそ手探りで模索しなければならなかった。そのとき彼は逆説的にも写真を忠実に書き写すことで解放される^(注4)というのが、1960年代のまだまだ若者だったリヒターの物語の始まりである^(注5)。ところが今日、リヒターというと、例えば日本では最近ポーラ美術館が80年代の良作を収蔵した際にも話題になったように、現存作家としては破格の値段が作品に付くことでその名前を覚えている方も多^(注6)いだろう。2015年のオークションではなんと50億円を超える値が付いた。このように作品価格が高

騰するのは、当然需要と供給の力学が働くから、つまり多くの人が求めているからなのは間違いない。とはいえ、それは単純に造形的に優れているからとか、表現として新規性があるからといった美術作品の価値のみに由来するものではないだろう。むしろ、様々な欲望がそうした価値を押し上げている。その1つは、ヨーロッパの社会或いは美術館が持つ、強力な歴史への意志だ。かつてヨーロッパの各地に博物館や美術館が開館しはじめた時、つまり18世紀末から19世紀にかけて、彼らが盛んにエジプトやギリ

ことのできる作家を彼らは自覚的にであれ、半ば無意識的にであれ、求め、作り続けてきた。芸術こそが歴史を担うことができる。

シヤ、ローマの時代の遺跡から集めてきたものがコレクションの核となっていたことを思い出しておきたい。そうしたものを収蔵することとは、西洋文明の起源を手中に収め入れることであり、その正当な

後継者として支配権力の妥当性を示すことでもあった。実のところそれは、今日においてもずっと続いてきている。広く歴史を背負うことのできる、背負わせる



© Gerhard Richter 2022(07062022) 撮影：山本倫子
「ゲルハルト・リヒター展」展示風景
※東京会場の様子です(東京会期は既に終了)

後継者として支配権力の妥当性を示すことでもあった。実のところそれは、今日においてもずっと続いてきている。広く歴史を背負うことのできる、背負わせる

リヒターは10代で体験したナチス体制と敗戦によるその崩壊、ドレスデンの大空襲、祖国の分割から冷戦下の東側と西側の全く異なる政治体制と文化、1989年のドイツ再統一といった、20世紀の激動の「歴史」を生きて延びてきた。そして80歳を過ぎてようやく、リヒターは昔年の課題として祖国ドイツの暗部であるアウシュビッツ強制収容所をモチーフに作品を描くことになる(この作品が今回の日本巡回展の目玉である)。つまるところ、リヒターの作品の値段が高いのは、そしてそれでもなおこぞって世界中の美術館がその作品を収蔵しようとするのは、彼の作品が歴史を背負い得ると認められているからだと言つてよい。それと同時に、リヒター自身もまた、自らの個人史を大きな歴史へと繰り返し接続し、返す刀で芸術の自律性を主張する。相反するこの振れ幅を可能にする強靱なスタイルこそが、彼をして現代最高峰の画家ならしめている。そして彼はそうした歴史を背負い得るヨーロッパ絵画の「最後の画家」をときに自認する。「歴史の終わり」が喧伝されて久しいが、さて、歴史を我がものとしようとす

略歴
豊田市美術館学芸員。名古屋造形大学非常勤講師。近現代美術史。勤務館での近年の企画に「ボイス+パレルモ」(2021)「2022年、埼玉県立近代美術館、国立国際美術館との共同企画」、「コレクション展 光について/光をともして」(2020年)、「奈良美智 for better or worse」(2017年)など。

(注1) 東京国立近代美術館の会期は既に終了しているが、14万人近くの来場者があったという。愛知県の豊田市美術館にて2023年1月29日(日)まで開催している。

(注2) リヒターの伝記に取材した2018年の映画「ある画家の数奇な運命」は、画家自身は気に入らないようだが、このあたりの展開をととても美しい映像でまとめ上げられている。

(注3) 2023年1月15日(日)まで同美術館のコレクション展で展示されていること。

(注4) 芸術家・会田誠さんは10月3日付のツイートでこうしたりヒター評価の在り方について次のように記している。「美術界がリヒターを選んだという面もあると思います。つまりヨーロッパの白人男性で、キャンパスに油で絵を描いていて世界大戦と東西冷戦という20世紀を象徴するものと直接人生がリンクしているリヒターを、アートの正当な継承者のトップに据えたいと美術界が望んだのです。アートの存続のため」@makotoanda